戦地を思う

ウクライナ侵攻と文化人

ロシア軍の侵攻で多くの死傷者や避難民が出ているウクライナ。両国ゆかりの文化人たちに思いを聞く。

原発事故被災者を支援してきた医師で作家

鎌田 実さん

この戦争に勝者はいない

1991年にウクライナのチェルノブイリを訪れて以来、原発事故の被災者を支援してきた医師で作家の鎌田実さん。「この戦争に勝者はいない」と語り、現地への支援を呼びかける。

×　×

ロシア軍はチェルノブイリ原発を占拠し、プーチン大統領はウクライナが核兵器の保有を狙っていると主張した。

2014年にチェルノブイリ原発を訪れた際、今も廃炉作業が続く3号炉の操作室に入った。とても丁寧でオープンな管理がされていて、もし核爆弾を作ろうとしていたら、外国人を入れたりはしないだろう。プーチン大統領は話を捏造して原発を脅しの道具にした。許しがたい行為だ。

ロシアが表面上戦争に勝ったとしても失うものが大きく、本質的には勝利ではない。この戦争に勝者はいないと思う。

一方で、戦争が起きた背景に米国や北大西洋条約機構（NATO）加盟国の外交力低下もある。

ロシアの全てを否定し、経済制裁とウクライナへの武器供与を続けるばかりでは戦争が長引き、多くの人の生活が壊れ続けていく。停戦交渉をウクライナ任せにせず、非公式でもロシアとの和平へ向けた交渉のチャンネルを持つべきだと思う。

チェルノブイリには91年以来、医療支援団を101回派遣し、僕も20回ほど現地に入り、甲状腺がんや白血病の子どもたち、居住禁止となった原発の半径30キロゾーンから強制移住させられた人たちを支援してきた。

被災者の中には今回の戦争でさらに国外に避難を強いられた人もいて、「日本チェルノブイリ連帯基金」を通じ、ポーランドなどに避難しているウクライナ人への寄付を呼びかけている。

現地の人々が今どんな思いで、何を必要としているのかに耳を傾け、目に見える形の支援を続けていきたい。

日本人とロシア人の建築家ユニットKASA

佐藤 敬さん

アレクサンドラ・コバレバさん

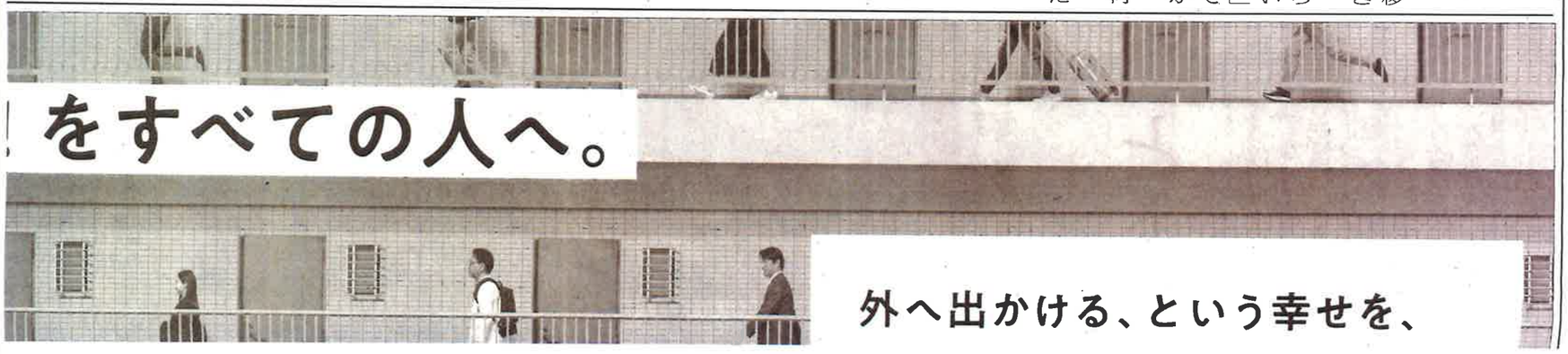
身近から日ロつなぐ

日本人の佐藤敬さんとロシア人のアレクサンドラ・コバレバさんの建築家ユニットKASA。昨年のベネチア・ビエンナーレ国際建築展のロシア館に参加し、特別表彰された。日ロの懸け橋を目指して仕事を続けてきた2人は、両国間が冷え込む今、身近な関係から築いていきたいと語る。

×　×

今春開幕のベネチア・ビエンナーレ国際美術展を巡っては、ロシア館の不参加が発表されました。20世紀初頭に建ったロシア館はこれまでにも、戦争で長い時は15年以上も閉まっていたことがあるんです。建物は常に国情を反映していて、今回の情勢でまた一つ、新たな歴史が刻まれたことになる。（コバレバさん）

平和条約交渉の中断など日ロ関係が悪化する中で浮かんだのは、「事実というものは存在しない。存在するのは解釈だけである」という哲学者ニーチェの言葉です。ベネチアではロシア館と日本館は隣同士で、昨年の建築展では、両館の間の壁の両側にそれぞれの言語で「これは『壁』ではない」と書いて展示しました。来場した人たちはそれを見て、壁の先のロシア館、日本館に目を向けるようになった。二つの建物を物理的に隔てている壁も、（解釈次第で）両者をつなげるものに変えられるんです。（佐藤さん）

外交関係の悪化は国と国の問題で、それをコントロールするのは難しい。まずは身近な人と人の関係から築いていきたい。（コバレバさん）

僕たちにできるのは、そういうことをやり続けること。国同士の関係が悪くなったとしても、個人的な関係が急に壊れるわけがないし、僕だってコバレバという一人の人間を信頼してるわけだから。今後は日ロユニットである僕らが建築家として一緒に何かを作ること自体が、両国をつなぐメッセージになるはずだと思っています。（佐藤さん）